

# 長崎大学における eラーニングに対する予備調査

## ‐“eラーニング”に対する期待‐

丸田英徳<sup>1)</sup>

1) 長崎大学 情報メディア基盤センター

**Abstract:** 長崎大学で継続可能な eラーニングを普及させるには、長崎大学に適合した eラーニングを模索する必要がある。今回、長崎大学の eラーニングが備えるべき要件について、本学教員を対象に意識調査を行った。

**Key Words:** sustainable e-learning, attitude survey

### 1. はじめに

全国の大学を含む教育機関において eラーニングに対する取り組みが本格化しつつある。ここでいう本格化とは、eラーニングを一過性の流行ではなく、継続発展可能な教育プラットフォームの一つとして、学校教育等に取り入れるという意味である。これまで eラーニングについては、一部の積極的教員による導入事例はあるものの、eラーニングという言葉自体に拒否反応を示す場合もあり、この言葉のもつ意味を定義付けることが、その普及に不可欠である。

今回の調査では、全学的に取り入れるための下地となる eラーニングという言葉に対する意識調査を行った。その結果から、長崎大学として求められる eラーニングという言葉に対する定義や方向性に関する可能性を探ることを目標とした。

### 2. 今回の調査について

#### 2.1 調査対象

長崎大学情報メディア基盤センター情報メディア部門では、eラーニングプラットフォーム(LMS)であるWebClass[1]を試行しており、そのための講習会を随時開講している。この参加者(教員, 41名)を今回のアンケート調査の対象者とした。

#### 2.2 調査項目について

今回は主に2つの事項についてアンケート項目を作成した。

- 現行の講義スタイルに関するもので、eラーニングへの移行についての可能性(障害)に関する項目
- eラーニングという言葉に対する事前評価に関する項目

表1に今回の調査項目の大まかな分類をあげる。表中の項目に対応するような項目(選択式)を作成し、アンケートを実施した。

表1: 調査項目分類

分類	調査項目
講義スタイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 講義でのインターネット利用</li> <li>◆ 講義でのPC環境利用</li> <li>◆ 現行の講義スタイルについて</li> </ul>
eラーニングに関する事前評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ eラーニングに対する期待</li> <li>◆ eラーニングに対する不安</li> <li>◆ eラーニングに対する想定</li> </ul>

### 3. 調査結果

#### 3.1 講義スタイルについて

まず現行の講義において、どの程度インターネットが利用されているかについての回答をまとめたものを、図1に示す。

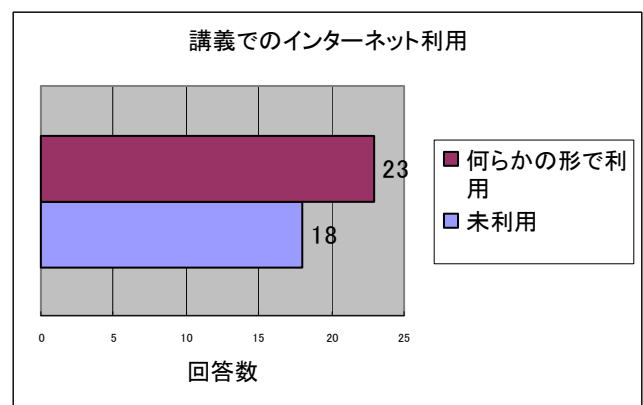


図1: 「講義でのインターネット利用について」の回答

この場合、講義時間で直接インターネットを利用するだけでなく、講義内でインターネットリソースの提示や引用などのみを行うことも含んでいる。

さらにインターネットやeラーニングコンテンツ（マルチメディア教材等）が利用できるようなPC環境で講義が行われているかについての回答をまとめたものが図2である。

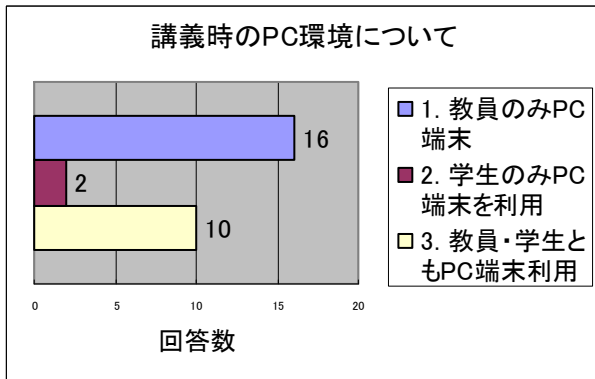


図2：「講義時のPC環境について」の回答

図2より、eラーニングコンテンツへのアクセスのために不可欠な講義時のPC端末環境については、学内に普及しているとは言い難く、このことが今後eラーニングを教育全般に普及・浸透させるための大きな障害となる可能性が高くなるであろうことが伺える。

現行の講義スタイル、すなわち現在の講義で実際に利用している教材や機材等についての回答を図3に示す。

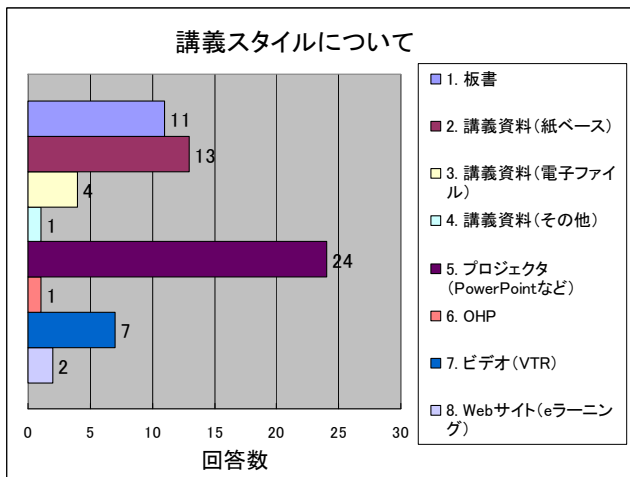


図3：「講義スタイルについて」の回答

図3からわかるように、実際の講義では講義資料については紙ベースや板書を用い、教員のプレゼンテーション時にプロジェクタ等の機材を使用する機会が多く、ここでも講義時のPC端末環境の整備が不十分なことが、今後の講義のeラーニング化に大きく影響するであろうことを裏付けている。

### 3.2 eラーニングに関する事前意識調査

今回のアンケート調査は、まだ本格的にeラーニングに取り組んでいない教員が対象であるため、eラーニングという“言葉”に対する事前の意識調査も同時に行った。実際の調査の項目は

- eラーニングに対する“期待”
- eラーニングに対する“不安”
- eラーニングに対する今後の“想定”

の3つとした。

まず「eラーニングに対する“期待”」についての回答を図4に示す。

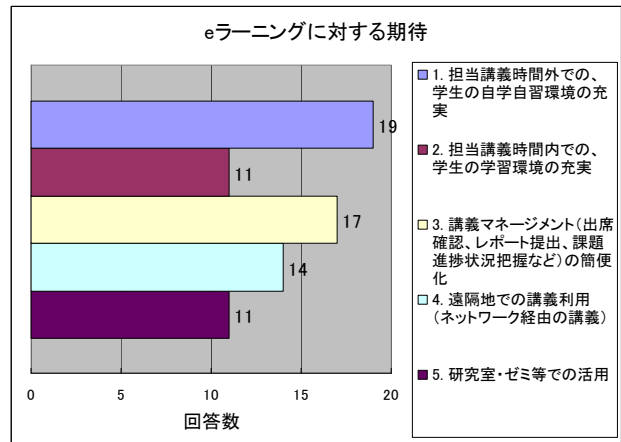


図4：「eラーニングに対する“期待”」についての回答

図4より、eラーニングに対してもっとも期待していることは講義時間外での学習環境の提供(自学自習など)であり、講義中でのeラーニングの活用については、比較的期待が低いことがわかる。これより、既存の授業における「対面重視」の傾向が、eラーニングの導入以降も続き、eラーニングは講義においては補助的な役割が期待されていることが伺える。また、研究室やゼミ等での利用も比較的ニーズが高いといえる。

次に「eラーニングに対する“不安”」についての回答を図5に示す。

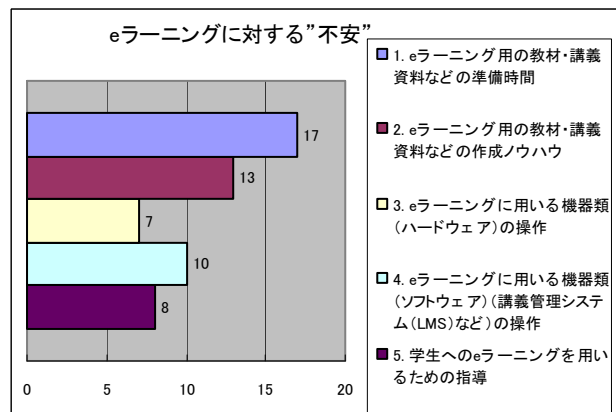


図5：「eラーニングに対する“不安”」についての回答

図5より、eラーニングに対するもっとも大きな不安要素はeラーニング導入にかかるコスト(教材等の準備のための時間や作成ノウハウ)であり、機器類についての操作や学生への対応については大きな懸念にはなっていないことがわかる。これはインターネット等の普及により、教員・学生とも、WebベースのLMSなどのツールに対して特別な違和感を持たないことやマルチメディア教材等がある程度普及していることにより、それらの利用への抵抗があまりないことなどが大きな要因となっていると考えられる。

最後に「eラーニングに対する今後の“想定”」についての回答を図6に示す。

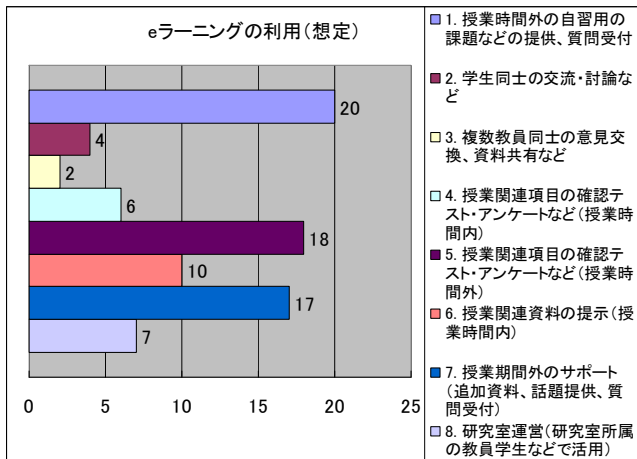


図6: 「eラーニングに対する今後の“想定”」についての回答

図6よりeラーニングを利用する可能性が高い状況として、授業に関する(授業)時間外の自習や授業関連項目の確認

テスト・アンケートなどでの利用に加え、講義開講時期以外でのサポート(追加資料・話題提供・質問受付)についての利用が上がっている。この結果より、これまでの授業時間内での対面的な内容に加え、今後の教育形態として、授業時間外でのeラーニングの利用による、学生への卒業までの継続的なサポートを行うことを考えている教員が多く存在することが分かる。あるいは、このような教育形態のサポートを可能にするeラーニングを提供する必要がある、ということもできる。

#### 4. まとめ

今回行ったeラーニングに対する事前の意識調査によりeラーニングを学内に広く普及させるために必要な要件が浮き彫りとなった。特に、講義開講期間以外を含む授業時間外の利用についてはeラーニング導入時のもっとも重要な要素であり、eラーニングを普及させる側は、時間外利用を念頭においたサービス(ソフト/ハード)の開発および提供を構築することが重要となると考えられる。また、インターネットの利用は必須であるにもかかわらず、学内でのアクセスポイント(PC端末室・無線LANなど)が少ないことは、普及への大きな阻害要因となることが懸念されるため、これらの施設の改善が求められる。一方で当初懸念されていた、eラーニングに関連した技術(LMS、マルチメディアコンテンツ)に対する拒否反応のようなものは以外と少ないものと考えられるため、ニーズにあったサービスを構成できれば、教員・学生ともにeラーニングのスムーズな導入が可能であると思われる。

#### 参考文献

[1]株式会社ウェブクラス: <http://www.webclass.jp/>